出會
第七席

時勢話綱目

一、二、三、五
四冊合本

へ違13
1872

序

夫倭歌(やまとうた)ハ目ニ見へぬ鬼神(おにかみ)をも
感(かん)ぜしめ人の心を和らぐる
ためし噺も又同じ耳とりて
興のおかし笑語(ばなし)ハいふ者號を
所頤ハ咲みをふくて鈍(どん)な田舎(ひが)
在鄕も猿どもをよむしゝ婆嬶も
が虚ハ一匹の出(で)拍子(ひやうし)下女の高

門 へ遠
1872
1-4合

孝(かう)ひ下(でう)児(ち)姓孫(ね)むり我殿(かどう)るし活事で奈さま家内孫縁(えにし)ひも縁有此無(な)の一徳(とく)あんべや甚甲乙を定めよ也曰し謝(てう)子(し)はよう覧いぞさしこと讃(よむ)之ぞん云紙(くし)の教(ぢく)本也そらぶらとい下(げ)戸(こ)上(じやう)戸(ご)にひとしく悦ぶ人も又あん徴(ぞし)る人をも多(おく)

かゝめいづを盡(つき)せぬ大あかしぬ実(み)大人齢(よはい)我延ぶ此席(せき)をも諸(しよ)好(かう)士(し)もあるしたまへとしかいふ

申とし
小春月

橋香亭
瓶吾

瓶吾

咄之七席目

時勢話大全 巻壱

橋香亭蘋昔撰

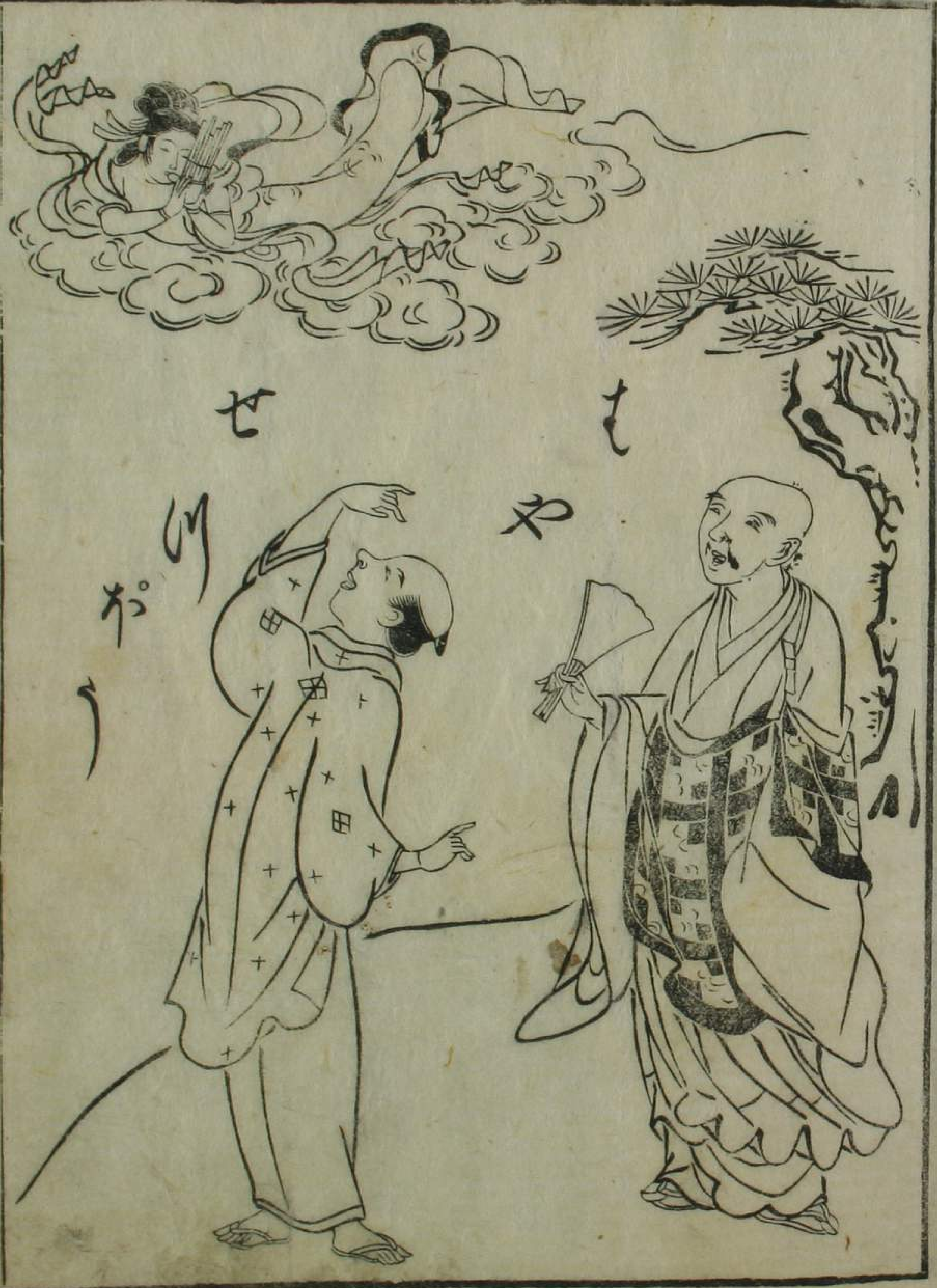
巻頭 早説法 杜子
第二 武蔵鐙 丸山
第三 旦那田買 花笑
第四 蓋出し
第五 日陰豆 青奴
第六 つがも無切味 若里
第七 饑旅 牝急
第八 汐の満干 朱揚
第九 鬼社旦那屋 倚牛
十輪 巻年始悦 小河
咄外 むしろ破 麻鶴

早説法

和尚さま方の云人ハ佛の事よりもあの佛でもおはしまず夫婦まさとのでござりません。アレハ絵にいわれども。中がよふて。一連託生とも契りあんで。まづ天上の果を願つても。後家ハおよ者ものが。それがなんの事柄ぞやと説き聞かせ居まさ。ハア、おう羅いまでござりません。ま男ハおよ喜びまする。そこでそれからその男が又百羅漢じや

武蔵鐙

いはしへの輝の果も今ハ下女だよもはやれさ。只女房と二



人丸の絵看板その日もちと雲へらちたゆくの母と門へ出られしも、直まれし時、ちよこ〳〵と呼出せし法師通りかゝれば、彼雑人是は法坊どこへ行ぞと言。法師 是は酒楽さん御出じやく。先お女らうも書されいで此月出るはへ。酒楽 身をとり閏へもまあの人くそやうりや一つ春ろちまあ。法師 是へ立寄しと言ふ。酒楽 吉祥ひもあまうとこねまて身をたゝく。女房出れば盃を持とて女房へ待合へ立寄さけばみお法師をとめて見て居る。酒楽 彼此語り合ひのあゝろとどうも法師だまりゐて返答もせん。酒楽 此坊主くと言ふ

法師がハイ。酒来　貴さまもさめて居るか。イヤ寐は致ませぬ

がさり〳〵をや松むしに笑入ておりまする

足打具屋

丁稚三人寄合。さきらの丁稚がいふにハ、おらの足打ハきつう上手が

名人じやげる。餅の木をうたせれバ雨がこず、巻やきさがることぶ

又壹人のでつちが、おらの足打も餅がさらへ上るとじや。此る道成

寺の鐘をたゝかれた。撞木の時分がふとまま今さ人の

丁稚がおまけにいふとおめのおらの足打もうなるハが

上手で此度熊坂をさせて。ぜんにて盗人が追込入さ

馬咄し

去道具屋に三人寄て代る。九兵衛　扨わハタア大きく日の丸

の扇子を買て見るがです　権八　まへ日出さいが太く六十里

とはつさかじあまりせんくあれど　九兵衛　イヤ十里や百里と

ハ云ハん　権八　影をのばしそんならハ里もあやさら　九兵衛　イヤ

権八　ふる大きいとね、かの径あらさ　九兵衛

されど、此雲に骨さいふら

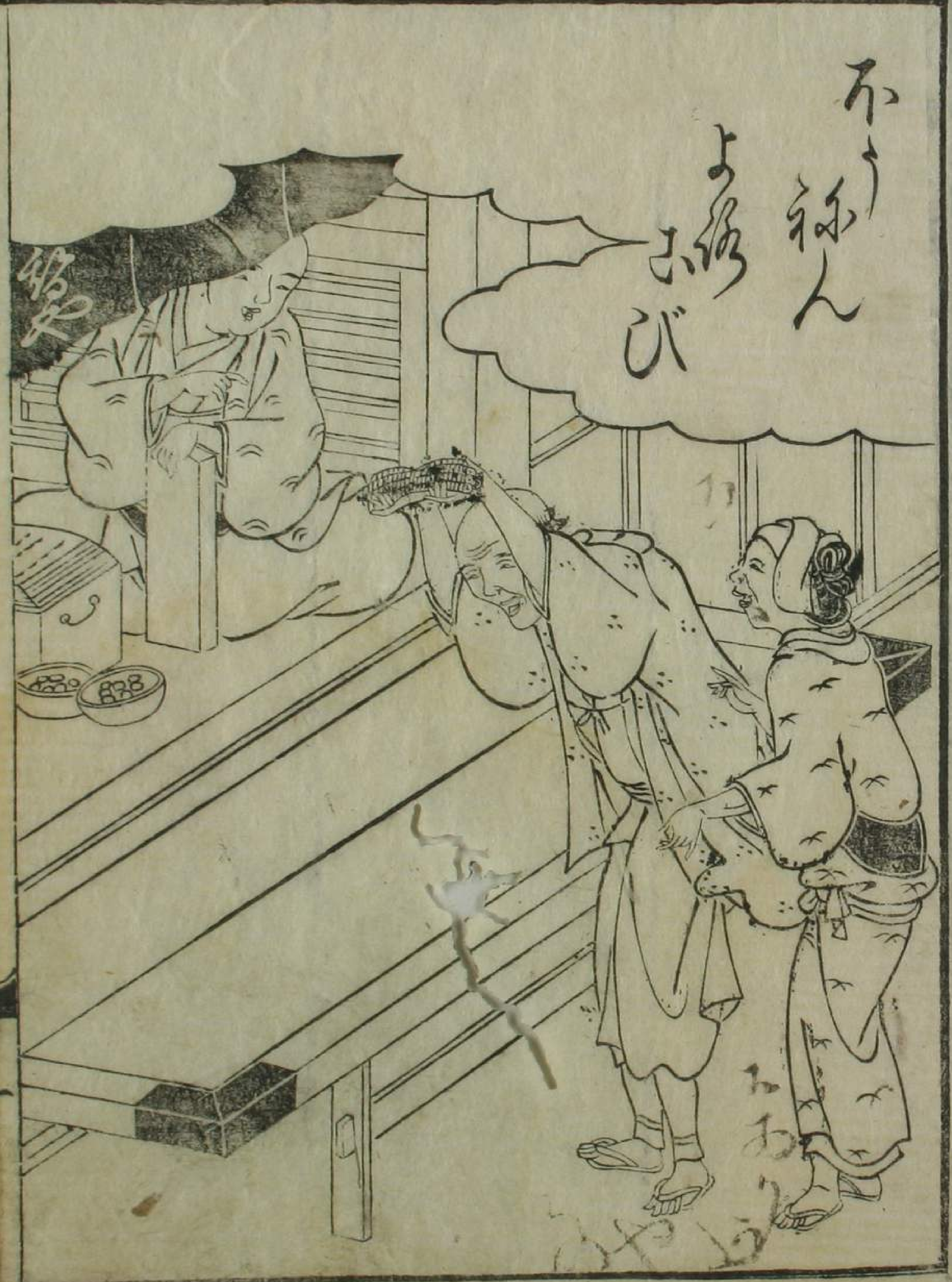
日蔭豆

去所に錦橋の指南する人あり。がおの市へ弟子を七八人

あるひよめり。咄くらは絵ほんで毎に。床(とこ)のまに七福人の掛ものがかけてあるを見て。アノ掛(かけ)物(もの)の人数はいづく(へ)客(くわい)連(れん)の中に女中一人でござるがあれハ誰であらふかのと問へハ。弁(べん)さんじやあろう。おさよふならおハエ。私しや大黒(だいこく)さんがよいといはな。イヤ布(ほ)袋(てい)さんがでつくりとしてよい中よしヨ。むかふのゑびすさんじやあげやうさんがよいといふを聞く娘て。ぴのおゑへまだせぐして。げやうさんがよいへ。私しやだかれても絵(ゑ)がはやる人

はなしも京切味

あるところにまけおしみの浪(らう)人若きころよりたくさんの金をつかひ切し。身に差したるものもうりはらひ。いろ／＼心をはたし一心(しん)発して武士の常なればとて切そり強盗(がうだう)と出かけ。黒(くろ)羽(は)二重(ぶたへ)のよかんゑ。なくそ頭巾に目ばかり出し大だんびらさげて或(ある)松原の木のかげにかゝる所へ旅人通(とほ)りかゝるを彼浪人がとらへて。ゴヲし と呼かける。旅人さらばなにやつと問(とへ)ハイヤさかひといふものなりぬつと出。さら代(だい)置てゆけといへばいやおやどとぬいて彼浪人をあげさまにお居て通(とほ)りければ彼死人ハむくさまをよこうれしやお金でたぞうさ



儀旅

右ハ以く舎馬省撰話総目第三の語ニ有

次の語丁

振（わら）つるべを孟そづしらし・おびんふもつるべもろ゛相子（えしと）をさにて母らくつるべをどり・河久んとこれであぬき井戸のうなしさ・みをえんとぬけてまへくる海に半ば・はる長をつきちからにうめあづんぐ・ぢく大平山にひかりの馬殺に絶頂（ぜつてう）に文井戸あり・ありもせぬそのぞけばあらくくら先生つぶうにとおらる納・瓶を井戸にあろせば緑（くとし）がハア　シワサメ

御仕立部屋

菊(きく)さん。おまへアノ今呉服(えんびら)屋へ挑灯(てうちん)さげて見て。アノわしじや
おめへ身がわるさへ。絵消張(ゑまきびり)にして袖子(そゑで)でもあらためたらどうするへ
持んなわしじや白ぢりめんを縫紋(ぬいもん)にしてあげることへ。イーヤわしじや
いやそ緋(ひ)ぢりめんで。あつらへとおもふ。アノ〇〇〇〇云イ

豊年の悦

行山里(さとやま)までも。近頃はあさき老(ろう)も少なうまきをたらしは祖父(ぢい)
祖母(ばゞ)連(つれ)まで大坂へ芝居(しばい)見物に来り。日本橋の茶屋にて。
銀(ぎん)拾ひ玉(たま)の見られた九百文たらずあつかひて親(おやぢ)人まで

あげうぎそうお款をしてあんとおな代気。コリヤ三味線(さんみせん)が
違(ちが)ひ〇まぜぬか。芝へ行くまりおかをおぎふそそが。〇代めでたい
発て今のお座でござりません。親父(おやぢ)様さく悦び。祖母(ばゞ)らく
悦びや。うくえの世中よあふまじや。その五尓で〇じや
ある太娘も孫の老年(ろうねん)じやそふな

延破里

むろしく祖父(ぢい)と祖母(ばゞ)鏡屋(かゞみや)の方へ行く。サテ今日は流あるは
此芸が三四へ。芝居みるがおもさもおぞえふ〇。サア日八
役そふサア我あも近頃此芸が〇く有と思て〇〇

きどれ。おやおあと流ハ時代が違ふゆゑ一向よ当らぬ氣も
あれおあと流も違も。当代の咄しハ逆もそりが違ハねばしま
さ々れ。イヤ／＼そんであれ／＼。尚まで念無よ極まて
ゆゑよ。ひらや、あまさの直安のものが。ちよいと〳〵よかろ
をききます

話大全笑の巻終

此所へ書記し御披露仕候

英笑話見屋　性急斎玄暉　八席目　全壱冊

忘これ笑語　咄評判の如く手評　二席目　全壱冊

青陽戯話閑　恵方軒福来　九席目　全壱冊

右三部　追日相続出来仕候御求め御覧下さるべく候

咄

寺九カ

[illegible]

咄会七席目

時勢話大全巻之三　　橋香亭執吾撰

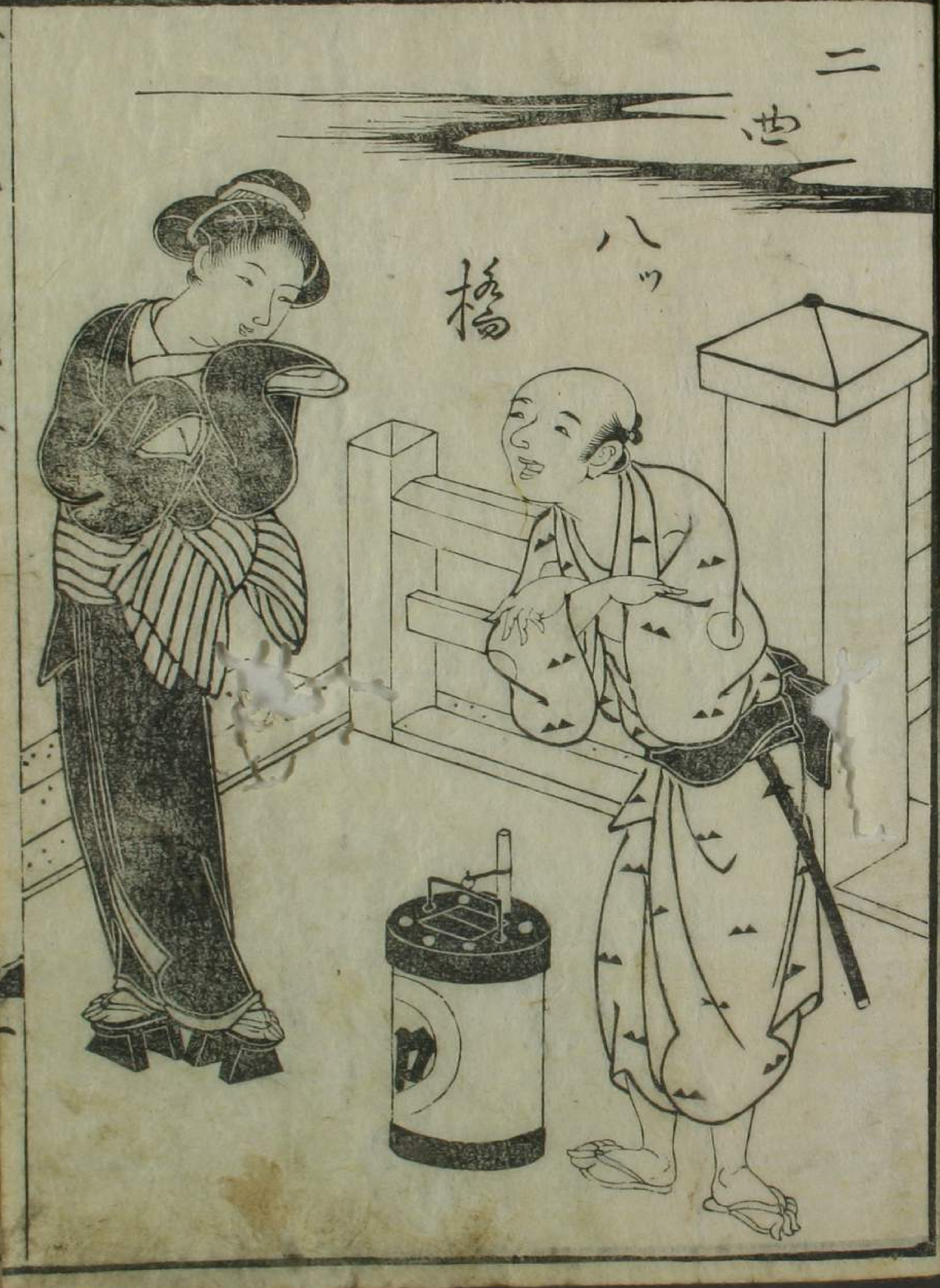
十一 撲切道　朱採
十三 まくの茶刀　柔陵
十二 肉外のせうふ　提婦
十四 縁先　対壽
十五 京肉糸　白水
十六 弥陀の光　自示
十七 巻坂　必く
十八 郎邊　不路
十九 雲坂の孔明　伏香
千軸 二四八口搭　必く
坐外 〓名丸の〓邊　福谷

撲切道

右は〓く会席肴撲話〓日四十軸ニ有

まくの茶力

長崎私てもなし。松前ぢもも足へだ。江戸廻りの私だゞ八まきれし。サテくわうさ私どやとよくく見れだ、行せう第〓大分つ〓ゐ。第の〓さを見ればべ、又指ニ万石抽大根ニうといとの書付。まり不思議又ありゐ、し。私どの此私は〓づくへめのでござる。是ウ此私は女護の嶋へめまれ



閻那のせりふ

所ニてまづ閻楽庁を出し・那ハ息子まで人がくはかりて居
打かし山伏通合せ見よ・手拾ニ拾て居る八行ニじやと
閻へバられるち見ハうちこじやとの・あまうの香具ニまでてを
亭主那ニハ平部姿じやとのよ・息子 閻へ延入親父どの
アノ山伏が五ひハ云イおやこ・我宿ニ拾て居る地へ行シ
じやとの子さ亭主じやとのさればこそ山伏が宿かぬぞ・
閻ニもてくるちこ那ニハ是へそとハじやと云おやこ・勢父
イテ通路して息子行ことのいますよ・ず人 おやさハ行でござる

と問へ。山伏じやうでひろ。ぶまあてて和山伏者も形よあまらん
形がしおやうそらへ。息子ひわちやんで行。まくイくと唄ば。
山伏 腕むけべお寺さいあんでござ 山伏 山ニ参りといふよ。
息子 ぬうらぬ執でたのしやで参つてござれ

鐘先

嫁さんお彼ヌ行さよりてよりまする。母 まくよふ来さが
コレ道よりせぞとふよ往まや。ぢぞよや往てから此ぬ十日
まもあルがニ四州深で勤よふ。アイ盈ハ陸ゐとよふび
ざりまぎが。親ハ。母 そ文るよりて福むさいの。イヽエ

旦那さんが。母 来りなさるか。イヽエ来らつてどや気が散の
由うまちり子の世ヒマちより

京内気

小田の人祇園会へかけて此めて京へのぼり三条の旅
籠屋まで至りまうの約ゑ。宿まよ是枕蚊帳を見付。
あまいぬよ嬉ゐのぞと思れ風ゐ。真ろ鏡の邑り押わ
がさるよりて皿数が出まするヌまを見と呟。中間へ。
彼客のまさいよ数をつてみまそべ。客 食まてきさ人御亭そ
入て至つしやき

弥陀の光

寔に名に聞へし浮世(うきよ)の一客。仙(せん)と云ふ冨家(ふうか)の主人あり代々金銀数多持つも我故に寺を建て西の海國(うらうら)を淨(?)を亭(ちん)の別荘を建させ。大座敷に茶会ひらきの催(もよほし)。今やくと祝りを待(まつ)御親類(しんるい)さん達座敷の数々に不思議を掛て。娘「仲何と仙さん、アノ掛物に画(ゑ)てはげな者は何といふ七福神の内かア。仙「左様、アレハ七福神の内で福禄(ふくろく)寿といふて。今度深山(しんざん)に食なく。ずつと長命(ちやうめい)の長イ人じや。額(ひたい)の長いのが紙を福禄寿の長いへあやかり

たい。娘「私もあやかりたい。アノおつむをちつとぶちよしておくんなさいまし。ござりません。仙「アノ佛(だ)をのせうました、イおさ度がとふしてあやかりたいぞ。娘「サイナア、あの年まで長生の顔はしげだいたいばかり

孝 娘

ご隠居(いんきよ)様もおかはりもござりませぬか。コレハ八公殿よく御ざつた。さ。マア、おはいりなされ。扨いつもお変(かは)りはござりまでござりません。サテ大分お若さがござりません。手前の見ますれば若く見えまされ。サア、きつうおつむもむずかしい。年よりありませんと眼(め)いりとよくなりませんと、又年寄も人と見まする気もございません。又歯(は)いもぬけてござれば豆(とう)

腐(ふ)より外の物へ香物(かうのもの)さへおろしでおろしで食べまする。今は茶ても喰(くひ)物よいはありませぬ。へうきんさまへ内ふ貝(しじみ)さへおざりませぬ。去らし何でもお歯も又今そお和尚菜をのこし一又十七八のこのよい亭(ていしゆ)えがお菜につけませう。

戸 遠

黒焼(くろやき)屋の親父(おやぢ)、近所の娘に惚(ほ)れてあるが、わるさぞもならず、合点(がてん)せませんといもりの黒焼かゝへて来り、縁起(えんき)よう出かけ娘(めく)、まづ人も度と彼娘の傍(そば)より婦(あね)どうぢやと背中(せなか)をたゝけば、娘はいつぞ腕(くびす)にかゝりおいてへまつやなぞと、去んだ又わさ度へかゝりつく。親父おやおやなまぐさめと、血(ち)のたらたらかゞやくまをかへ走って戻り、ユリヤく手柄(こふ)の角々の黒焼(くろやき)のさちなんと来て見て居る。丁児 ハイ。そさ狩へ狼(おかみさん)

蜘蛛の孔明

江戸より登りし侍(さむらい)大津にて。蜘蛛 旦那(だんな)駕籠(かご)よ出しませぬか。ムウ其より京へ行駕籠(かご)ちんいくらでゆく。ハイ百文でおざります。今高い百文悟よまうけん。ハテ高いかご高しゃなア。侍呟て小声(こりう)しておまへさまのかごを始しと云ふさか。イヤおまへさまのてドやおざりませぬ。イヤ荒大たかるのじや。イヱく私るので

ござりません。ナニ我等と云をよふした訳で ハテ かくれもなされませぬ

としるのでござりませんよ。気の毒じや。所を出しまつりさお。

二四 八ツ橋

ある田舎もの来さ。遠出（ゑんで）のおとこをよんで。在人（ざいじん）を道頓堀（どうとんぼり）へ近所（むら）のよわと云付られぞ。ハイ私は道頓堀へはいきませぬ。つゝと文あれら新町橋（しんまちばし）を存じているか。ハイ知っておりまする。その新町橋へいて流れ（ゑゑ）を東によると四ッ橋といふてある橋が四ツある。ハイ。その橋を渡って東によると廓じや。フヽテ川端と通て北て新町だしへ来て渡（わたり）あれとおしへ曲りましたと箱（そこ）挑灯（てうちん）提（さげ）て新町だしへ来て渡（わた）らば浜側（はまがわ）好のやとおへの送り あとぐよ来て ゑびす橋（ばし）咄を。サテモ帰んでじやとて往来で咄ッ。橋を渡ってまたゆきよめ。モウ宿（やど）でおまへと云へ難所（なんでころ）でさうとん堀の川端と云行れでおさると何処ぞやそうなみ宿へらんざやだじや。フレハ宿の咄だしを渡って東へよると道頓堀（どうとんぼり）やとおしへらんやようおまへと云へ廓り。宿が今の咄だしと気（かん）入て皆きて東へよると 表へ新町だし是へもうしさあじやと。ゆきおまへの知んでも宿（も）一度咄ッ橋へ往て見てとまた咄ッ橋へ廓り。コウ渡って又ユウ渡ってブウとコウワ。コウ言うとさあみち

ドヤ。コレハふしぎと悋（りん）気（き）の因（いん）果（ぐわ）悪イ着（ちやく）お若（わか）さん自分が舌川（かは）岸（ぎし）より上へあがるを見て手をすりドヤめろめろと眉（まゆ）に唾を。

綽名の有遠

ナント治所云上方にはめづらしいあだ名じやさう。イヤ何もめづらしきハ無シサテ上方の芝居で参るのはとかく役者の名を云ずに拍子気が能ひと下にしの字を付て参ります。デア角の芝居座本の小川と申すが出ると、ヨウ英子（えいし）といふて参る。雛（ひな）助（すけ）を猿猴（ゑんし）なぞ、を眼（がん）子（し）。治郎三が出るとくろんしなどく皆下よしの字を付参ります。夫より見ますれば役者が出ますとさまで下手にして見へぬ気が参る詞がありませんだ。役者の口切り上し

詰大全二の巻終

▲此所へ書記し出板仕候

頓会咄歌立　増合大梁　四席目　全五冊
智恵競咄揃　笑顔亭対者　五席目　全五冊
新撰噺番組　菊花亭流水　六席目　全五冊
時勢詰総目　少く合馬宿　七席目　全五冊
安撰咄評判　（役者評判記定之例ニ習ひ位付を定め咄の甲乙を撰む別当御席之）　全五冊

右の本当正月二月より出し升かは御求め御覧可被下候

咄家七席目

時勢話大全巻三

橋番亭貌言撰

十一 乾坤　對壽
十二 住吉詣　渉江
十三 節分　不孫
十四 今清姫　朱橘
十五 藍の紋付　浅山
十六 猿の神　杜子
十七 鍍　泉岳
十八 夜明の烏 [redacted]
十九 大江の岸　大梁
二十 若夷　菅丸

乾坤

芸人くお熱がきつうて手足こまと　アチコチ痛も身
さがよりお暇よあそりませなんとおおおとれどうおあけな
されどう。ハイ夜お病ら色ほして。へこゝ右の仕合

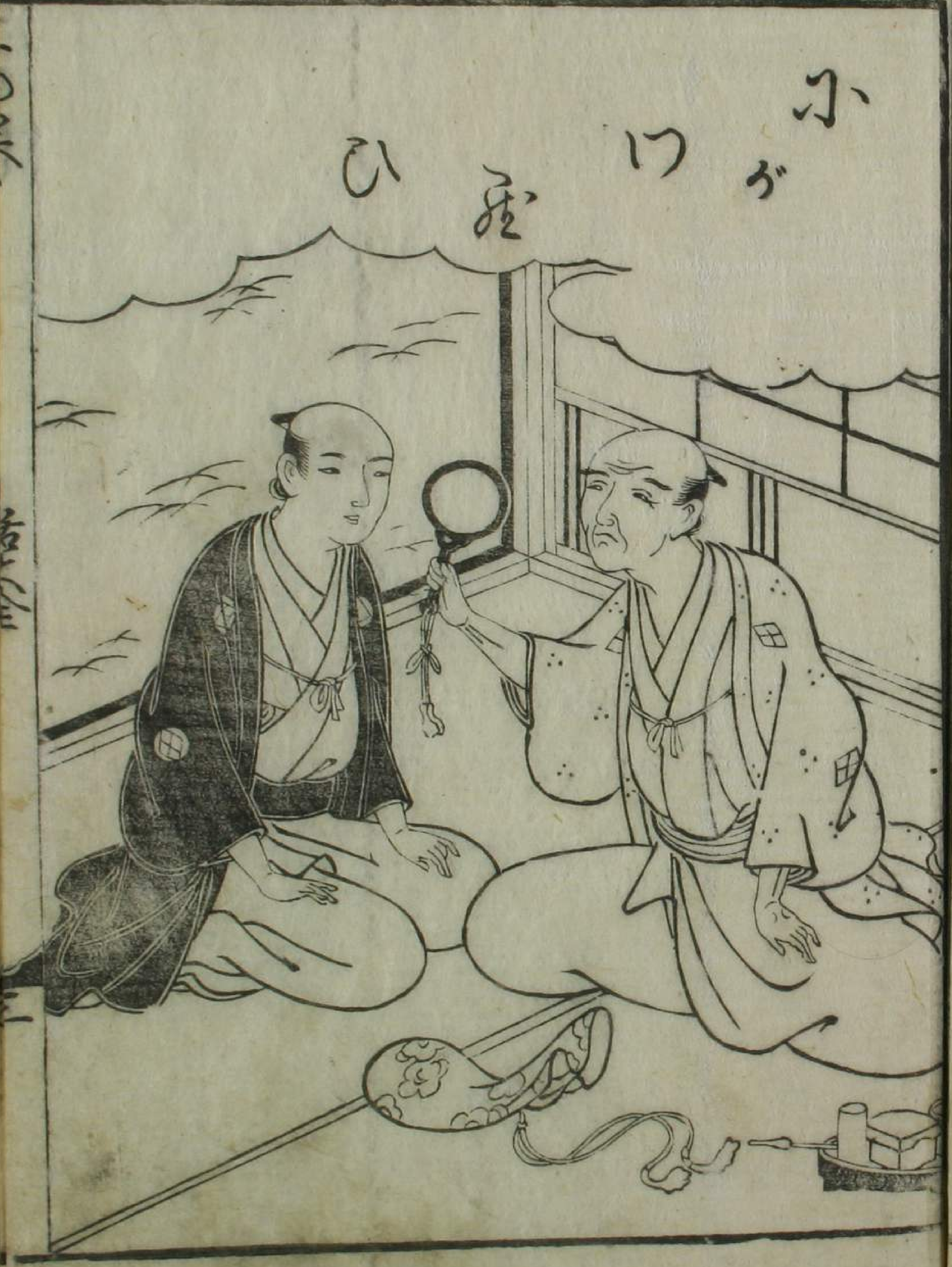
住吉詣

和漢色来同座の身代ふ沢。湊に院へ赤飯を喰て歩行しが。
先手くでるト下がふ我とやまを中を大あき。先の文だのおれ
たぶ。今でも今宮の戒めかう住吉へ来り。道をまがり悪むべしと思
一人乃細はプト道づき出来。不運の男わるさも住吉へ来

なへそうな。アヽどれでも此せんじやうな宮でござりまする。志らしは茶のお物でハ実入がなく、おざりませうてやと是ハ。手代なうも体をなしおかれ

芸節　合

コリヤ〳〵　延命袋のお厄年。お役へ申せと差出せば。大儀ま色ざいり豆と小判弐歳さて厄拂一トロ是出せとどれさ是二流石と廣庭五支多事中ます。只今此門出まて厄まらひ。ヤアラ目出たいあア　あれやら目出たいあおおさの由やく今をもさべと召もえしぬよ次の子お。申しわけござりまする所へくお招ん



惣は万の口。東方朔は九千歳とやまん人。次の子もやとまん人。浦嶋太郎は八千ぶん三浦の大介百六つとやまん人。紙と筆いちくよ書くべ。コリヤ／＼夜中の對面は叶ぬと云さんす。明るは新橋の渡り初。一夜は万年の亀

今清館

長崎よ有者壱人の女と仮りよ契て夕々よ夕むかへたまの盃ゆびきりあへと女は婚札を急ぐ。内。轆轤首の身を咲出。此男たまらぬ夜の夢よ思ひ出。逃る後よ後ろ首見を咲。たちまち恐しき首ぬけ出て。追る後よ跡る縁よ説へあり先キへ参り。海を越山を越。遠く奥州まで追来りしが。余りの辛労さよびる首の訳よ。体も和らぎ急りよおびえしき里へもあり。先息をはざと云ひ後ろ首いもをあまさ喰ひあれだ。

長崎でブウ／＼

盆の紋付

去寺の和尚旦家へ法事よ来りしが。いろ／＼と提灯よかゝる／＼と寺へ帰りしが。留守居の僧出向ひ。お手ハお帰り今日ハ紋付ザゾ／＼提灯を嘸下しと云ば。和尚イヤモフ提灯の紋ハ縫部ハ皆京都だらけで見さま。又ハ云ア気をさとれはしさか。

まづ〳〵お体を拝まれませ。和尚おくへ参りお経よみて新来の鑓（やり）楚男霊（たま）のまへより中伝入さま。アノ今和尚さまの作られてござりまへてア。どのやうなお佛（ほとけ）さまでござりません

福の神

コレハおびたゞしい[illegible]のでア。なんと云ふのじや。サア咄てたも。先度まかれと大坂へ往し時。中の芝居のさんざ[illegible]居さ女良は、おもしろくで又。此方大坂へ出かけて日比[illegible]長町裏の見[illegible]やりん[illegible]さまへ這入てきざく[illegible]居られだ[illegible]とも[illegible]ド江戸（えど）[illegible]の内[illegible]百足（ひやくで）が[illegible]くと出て来て徒の中へ[illegible]て。ソレハ目出さんそん[illegible]も女郎も肴屋よふ立。[illegible]でも仕て連て居らさのう。イヤ〳〵モウおかへべく。れまへ福の神の[illegible]が見るのの。プウそん[illegible]自まへのお母さまで[illegible]方へお続が出来さ。ウイヤやら出てまよめて

鞭

一日[illegible]のそこらが死人[illegible]ば。[illegible]さよも迎づきされば。どうも仕ようもなく。イツソ死での[illegible]志[illegible]嫌されだいとし。鞭を喰て[illegible]とおもの肴屋へめ。コレ〳〵鞭の[illegible]がある[illegible]りへまえ。肴屋ハイおござりますといつて[illegible]より出し直へ[illegible]

又でござりません。客ソリヤきこえんが悪イ。酌ませぬ

庭明の山葵

居続けのあり酒に仲居もぞんとあぐね果て、茶を今ハ銚子酒二ツで座敷をくろめる内、カノ大尽さんの大盃を引よせ、ぜひさあ呑むへと若ちやりほして仲居も碗で茶の方のてうしでづどつぐ一世の名にあせずに手を大てあのハンコで有ませんと先ヅ酉カノ盃をクウトあして、舌鼓打そこさぬ気にかつくをさかさぞ盃。チョトいうちやうさの紐となるあたいでも白湯のチヤラリ。ハウ。浪人気色るがえかさおぞりでぞう母らかう母ら座敷も納り。又もよのさて盃に大尽からぬ江ぞる。今度ハ仲居に暇くださて酒の方を丁どはく。大尽一下口呑こで下に置。己もおやぞりきちらませう

大江の巻

大きな町々の鮮が此女中に可介の入ぞよきさものぢやヅイ。サア此めえびどや。集会が神道者やよみて稲荷さ身をまつら石をまつ。又で此母中ニ我か鮮がなあるりません。バテ又ハ女中えんも稲荷さ身を祭ることそれなしがなせてえ

せかいのでござりますといふものじや。サア夫でもいかりが杭に遠のいたぞ。ムウ　フウ　其めでも杭や橋杭が其杭に目ばにおれをのでいなし。又杭の友よりでもあるまい。ハテ扨や指手がちらに云ふ筆ど。杭じやといふを證據いの。何ゐでもかしこでも皆。含。含くと云ますぞ

苦笑ひ

中親父さま仕るゝ人相にあたりかられてござりませんそうな様ながられか相チヨト出らして下さりませ。親父子を見んると親はあらぞ相見るに及ばぬ。息子　イヤ〳〵夫でもこのぬ親志らぬとやりまれじや。悉く。親父何をぬかすやら。親のあころに志らんでならぬぞ。息子　イエ〳〵ござ親の心子志らぞくするかもしれし今の世は皆子のあころ親志らんに落ました。親父つゝそのいふ事が見て居ると云ふ大眼鏡を出し敷におて先親に似て保壽院より　志らし今年は大きなものじや。ごく此さんぼれのあくろをされと志だまくやりホウ〳〵あれも見るあんなんも見るなるほど遠ひてあるのがよいへ。イヤ〳〵女繪へおざりますぬかな。親父　それを意ぐロ切つ

噺大全三の巻終

咄之卯月

時勢話大全巻之[redacted]　橘香亭執吉撰

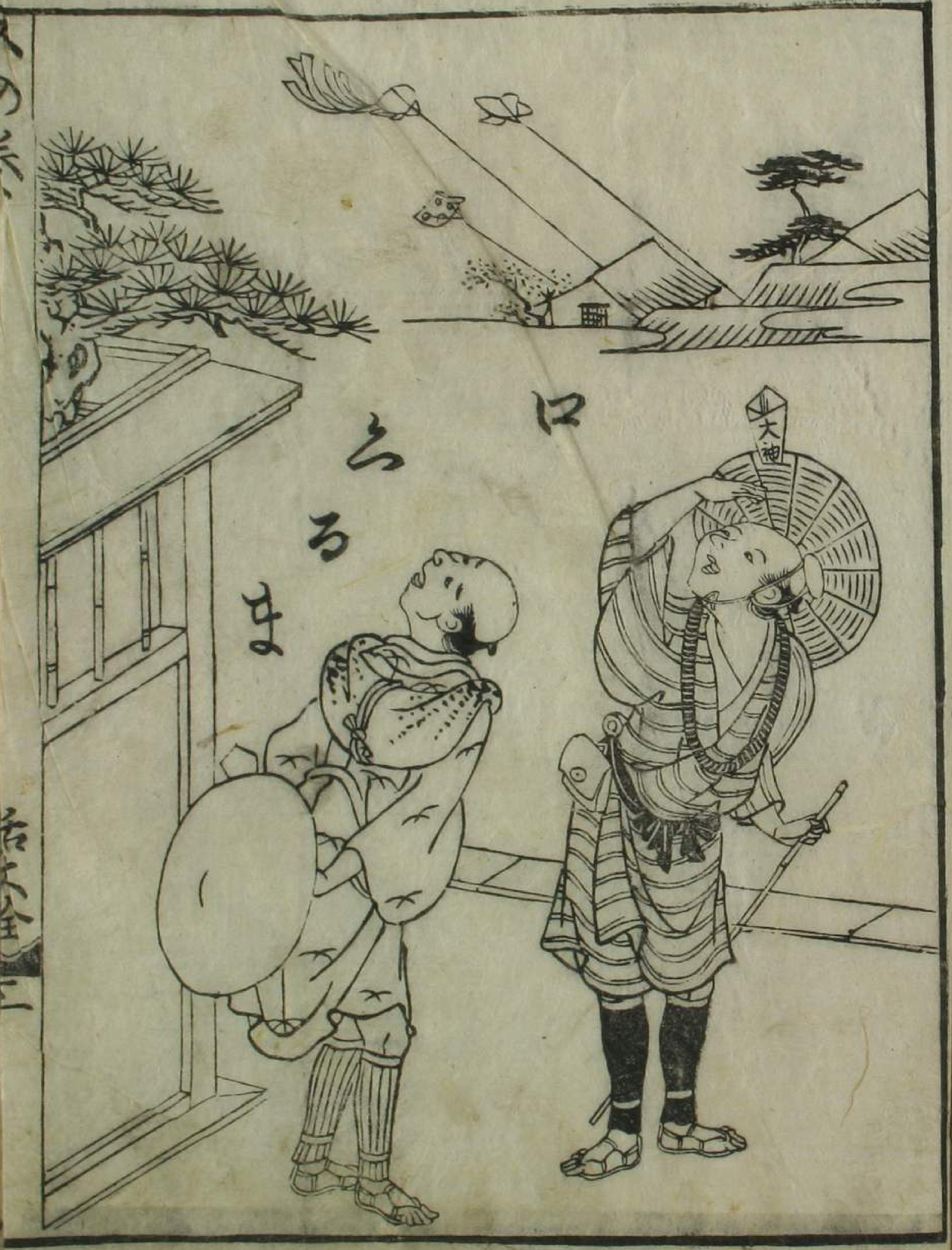
咄十一　井の内の蛙（かはづ）　咄十二　二斗の酒（ささ）　桃太郎
咄十三　雲荻當（あて）　増田　咄十四　蚤むしろ　布生
咄十五　涼　鴨く　咄十六　小夜嵐　大梁
咄十七　夜（よる）の鶴（つる）　花久　咄十八　三ヶの津　滑甍
咄十九　見せ大根（だいこん）　チヤ　弁熱地　口車（くるま）　加鉄
塗師（ぬし）　鎗将棊（しやうぎ）　鴻山

井の内蛙

婦ドの山の裏を見るに出かけしが。はるかに出かゝるとさきのすが合まて追（おつ）かけしがあまりく後河（ごうが）まで追かけられ。せんかたなくそれよりことまでやかされど。そこらにて何も知らず道にて此所（ここ）にまぎれ出ならゝ人をの文でや出い出と婦ドをよびよせがゆりびをかきさけろり去て爰にあれく

弐斗の酒

此百京への都へもさけ奈の。ヨイノヨ京に行も珍らしき在すいなかものさけがのみたく三条の宿屋を坊（だん）さ衆がとまられさ朝飯（あさめし）



在武州焚(こう)して。一度は吟ぐさげなが。京中へ出沙汰(ざた)しや。なと
凡皆義なるじや。気がそれ程なりもえらそうなヤイヤ人る
つきでへあまんでや。イヤそうも云かれめてや。隣村(りんそん)の庄屋どの
の息子(むすこ)なら。あさも知って居る座りあうひ治兵衛(のゑ)じやがせんども大
坂へ登りよよだまさ时きろ出されは座敷(ま)で居ことあるが

雲を當

去ていかのぼり大好の人。朋友(ほうゆう)の所へゆきしが。まづ是は御家来衆か
らしんか。アイ己しも此る時山へ往かんしく。まで又帰りしか。アイ
あつかぜのておかゞりほどさ。つて(こ)あがんで帰(かえ)りしかるのがろさで

まゝアイまづがさおりはあつま天人なと見ますほどぞそれは揺ら
しん。イヤまだやつしんをのさ寸さそ。なんぼやなア。お月さま
がかさをかしておざりやさ。イヤそれや下がつも見ゆる。お月さまの
かさハおりやこそのイヤく　お月さまにハかさハあれなんとしく。
ハテまかりよハ国よ来てどや

かいこ莚

二階(にかい)の子供衆(こどもしゆ)。むごんやくとハたがやくそれはとも
なくやうほく。當番(たうばん)の兄弟子(あにでし)。コレく皆。むごんとおゆや
ゆそどやぞくやうほどそのおやや。やうほどそひさう。又お師匠さん

の首が出るぞく

漆

右ハ少く舎馬宿撰話總目三千八番揃

小庭嵐

念佛(ねんぶつ)の功力(くりき)にて極楽浄土(ごくらくじやうど)の繁昌(はんじやう)に閻魔(えんま)王宮。次第に
おとろへ。牛頭馬頭なども淋敷て。行かたなくさことする中
に。談合や地獄の物知り集(あつめ)。元ハ扇東物。役者ハ名石なる對山(えんま)
や。羽猫王の五安(ごあんどや)者ハ善本正三。余外冥官(やくらん)倶生神(くしやうしん)。荷主の
鬼の目にさへ見落し。の趣向(しゆかう)もひらべと。レイノ見る目が首延

し大坂の写りをしつて。猫王へひそうの沢をさがさしつて。がしこを八ツ人あてへはおかげさまよたけど。子まえの素紙半紙の十手もいろく呂東の宗中へ。見ル眼 中さまさん。猫王 何するぞ。見ル眼 月本の出生大席目を。對山追善とてつ人へ對面が孫の留板熊イ出しをた大分汁穀しましさ。猫王 ホイ来へてアあのこらこのたんとまる。家じゃあうもやまナア。熊イハ後に返答まくへまる

夜の机

夫婦あうで文盲あそせまるせよ。子細らしへすこそしがる。足ならら知つコリヤ吉次郎。沖が高イ夜あかひきうかあの灯心を一ト節よせへ。ハイ一筋でおざりまん。がころうて夜あが見へますおざりまん。掛んあつけして石摺をあく

三ケの津

たまえおうしや。雅柳をお出とこはまよ膝をとされ合がおい江戸へ社あほしさげあ。客板江戸でござまよふ御さお生まれ光での。又戻りまう京でよんざも良もござまんとせうどや。まくをかん頭が

見せ太根

寺町のゑびすまへまゐりあると拝んで立れあり。途方に暮る所へ又壱人来りて。アレハ何の札でござりますと問ければ。子細らしく来迎ハ能ござる

口車

遥々遠国へ商内にまゐるが。上方をめぐり廻して。おほかた大坂などへおこしなされませぬか。先道頓堀には芝居相又住吉天王寺川口の霊仏。秋の比ハ見せ物どころもござりますと云ば。田舎人今云やうなさつま摂津と云ハ。ぞふさいじやと云へば。商人。お知らせなされませぬか。長イ糸の

さらさらば此中へ汁を付て。その汁に海老をさして釣ませふといへば。田舎人ハテ丈夫ハよく致したものじや。いかさま左やうならもおりこ参宮の宿がさで見中さぐ都人へあしやうにおぼしや五中さ。巾とやらで糸をのばしさげ。定て釣でも海中の魚

賭の将棊

先者ね将棊を教へて貰ろふ。ハイく。弐まいおちにして貰るへ。ハイく。ござれとさせよ。ハイ。先様からさしませう。イヤちよつと此所にある飛車と来ありさ。ソコデ角行の頭へ歩兵を付るへ。ハア角行がまかれまして。ナニト。ひつかう

よの表

ろがな。ハイ。嘉所へ九郎の东小の器怩よてと瀬へ立れても
やし。是ねさんしく飛車を王将を。コリやどふぢや。やアら
くむこんなまあわとますけよおりを今。そて猪のお茶てあるか
ともの。パアコウフ太郎のかどやよのて。ぜ吉太郎まんを見ん
さいなア

話大全五の巻終

安永六酉年正月二日新板

噺集法会頭　順慶町八百屋町筋南へ入　髙橋榮治軒

御書物所　心斎橋博労町筋壱丁东呂次木町　澁川久蔵

京都噺集所并本弘所　寺町姉小路南西角　菊屋安兵衛

大坂書肆

道修町大和橋南詰　山田屋久兵衛
曽根崎新地弐丁目　丸屋平兵衛
あはぢの橋北いや町南へ入　板木屋伝兵衛
ときわ町小浜町角　海部屋勘兵衛
あはぢ町壱丁目筋南へ入　奈良屋三兵衛
さげ町南紺や町西へ入　伏見屋嘉兵衛
心斎橋筋南久宝寺町北へ入　塩屋平助

噺の会へ新作趣向の咄噺御入来下されハ御よせ下さるべく候左の
集所まで御出し下さるべく御住居御名御近所随意御加入有之候